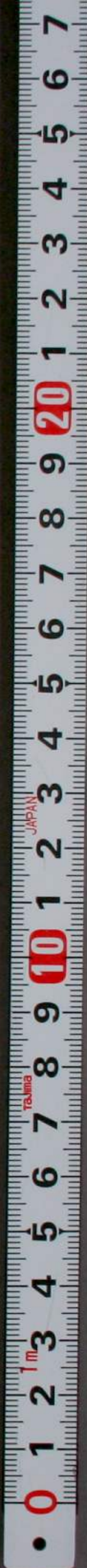


水
越
雪
譜
二
編
終

ル 4
3131
7



114
3131
7

島田藏書



北越雪譜二編卷之四

目錄

- 異獸
- 弘智法印
- 白鳥
- 浮島
- 美人
- 苗場山
- 鶴恩小報
- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下標準
- 三四月の雪

通計十三條

雪譜二編卷之四 目錄 廿三ヨリ 文藝堂藏

山中異獸の圖



秋月養牧之羊山

色少く毛の脱する似たり腰より下小枯草をまゝ此物よく人のゆふ
ことふあふひくのもちやく人小馴しと高田の人のくつき按ふ和漢三
文圖會寓類の部小飛騨美濃あるひ西国の深山小も如件異獸ある事
をあるせりささづきの深山小もあるものあり

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪源内火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工小誇り没しそのうち其術つらうず好事
家の憾事と志く小我國嘗火浣布を作るの石を産をその在る所々
。金城山。卷機山。苗場山。八海山その外小ありその石軟弱しく凡を
ゆつても犯さばき不ぞの軟者石ありいろ青く黒しこまをくらげけバ
石綿を出え此石を得て試し小石中小在る石綿といふもの木綿をこを
細く細くを二三分やくふちまりさやうあるものあり是を紡績する小秘術

あり火浣布を造るあり其秘術を得ば小女子も火浣布を織るべし
○さて我驛中小箱荷屋喜右門とのりの石綿を紡績する事小千思
万慮を費し竟小自その術を得て火浣布を織いざり又其頃我近
村大澤村の医師黒田玄鶴も同じく火浣布を織る術を得たり久々
秘しその術を入小傳へざる小むすし時あり村つぎふておろし火浣
布の奇工を得るも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此西
人の説をききし小力をつくま二丈以上あるを織うべし其機工容易か
あつとより平賀源内六織を五六尺小過ると火浣布考のいへりまた玄鶴が源
内小まよりする事ハ玄鶴ハ火浣布の外小火浣紙火浣墨の二種を造
まり火浣墨を以て火浣紙小物をまき烈火小かけ火とありしをま
うふとりいづし火氣さしむ紙も字もそのごとくありしごとく其實用
をいふ火浣布も火浣紙も火災の供あり憑ぐしいんとうま火浣

遇ハ俱とも火ひとあり人あり火中よりいづきま火ひと俱とも碎くだけく形かたちを
あつた灰かとあつたのこりこり觀かん具ぐハ用もちうる所ところありあり源内
死しし奇術絶たえたり小件こけんの兩人にんハ火浣布かゑんぷの機術きじゆ再世さいせいハ小
嗚呼あやう可惜こく此兩人にんハ術じゆつをつとむるとむ後ごハ火浣布かゑんぷあり世よハ絶た
よりかの源内ハ江戸の饒地じやうちハ火浣布かゑんぷを織おりゆゑ其聞きこえ高くあり
兩人ハ越後の辟境ひきまぎハ火浣布かゑんぷをおりゆゑ其名な低ひりゆゑふあり
〜〜好事家こうじかの一話ひとハ供くわうす

○弘智法印

弘智法印ハ兒玉氏下総国山来村の人あり高野山たかのやまハあり〜密教みつぎやうを
学まなび後生国ごせいこくハ飯いり大浦おほのうらの蓮花寺れんげじハ住すまり行脚ぎんぎやくハ越後えちごハ來きり三
嶋郡野積村のづみむらハ里言りごん海雲山西生寺かいうんざいせいじの東ひがし岩坂いわさかとハ所ところハ錫しやくをとりて草
庵くさあんをむむび〜貞治二年癸卯十月二日此庵このあんハ寂じやくせり辞世しぜと

口碑こうひハつとある哥うたハ山岩坂やまいわさかの主ぬしを誰たれと人問ひととを墨繪すみえハ書かき松風しょうふうの音
遺言いごんあり〜死骸しがいを不埋ふまい今いま天保九てんぽうくをさる事こと四百七十七年しよほくしちじふしちハ
り〜枯骸こがい生なるか如ごと〜是こゝを越後えちごハ四寺しじのハ一ひとハ数かずハ此事このこと雜書ざっしょハ
散見さんけんとととも圖ずをのせりゆゑゆゑハ圖ずをさふいづと此圖このず
ハ余あま先年せんねん下越後げえちごハあそび〜時目撃ときめげきハなる所ところあり見みる所ところハ面
部ぶの〜手足てあしハ見みえを寺法じほふありとて近ちかく觀みる事ことをゆゑさハ閉眼へいがん
皺しわあり〜眠ねり〜如ごと〜頭巾づきん法衣ほふえハむじのま〜あ〜ある〜
是こゝ他国たこくハ聞きる越後えちごのハ一奇ひと跡あとあり

百樹ひゃくじゆ曰い唐土たうどハ弘智こうちハ似にたる事ことあり唐たうの世よの僧そう義存ぎそん没なつて
のち尸しかばねを函中つとハ置おき毎月毎月其徒そのととをいづ〜凡つら髪かみの長ながさを前まへカ
薙はり常つねとハ百餘年ひやくじゆねんを經へりも廢やせざりしハ後国のちこの〜つれ〜ハ
因より〜を火葬くわさうせり〜とと又宋人そうじん彭泰へいたいハ作墨客さくがく揮犀きせハ

別州の僧无夢も尸を不埋凡髮の長き義存小同トかりし

婦人の子小摸らまじ

より凡髮のびざりし

とぞ事ハ五雜組小

記て枯骸の確論わ

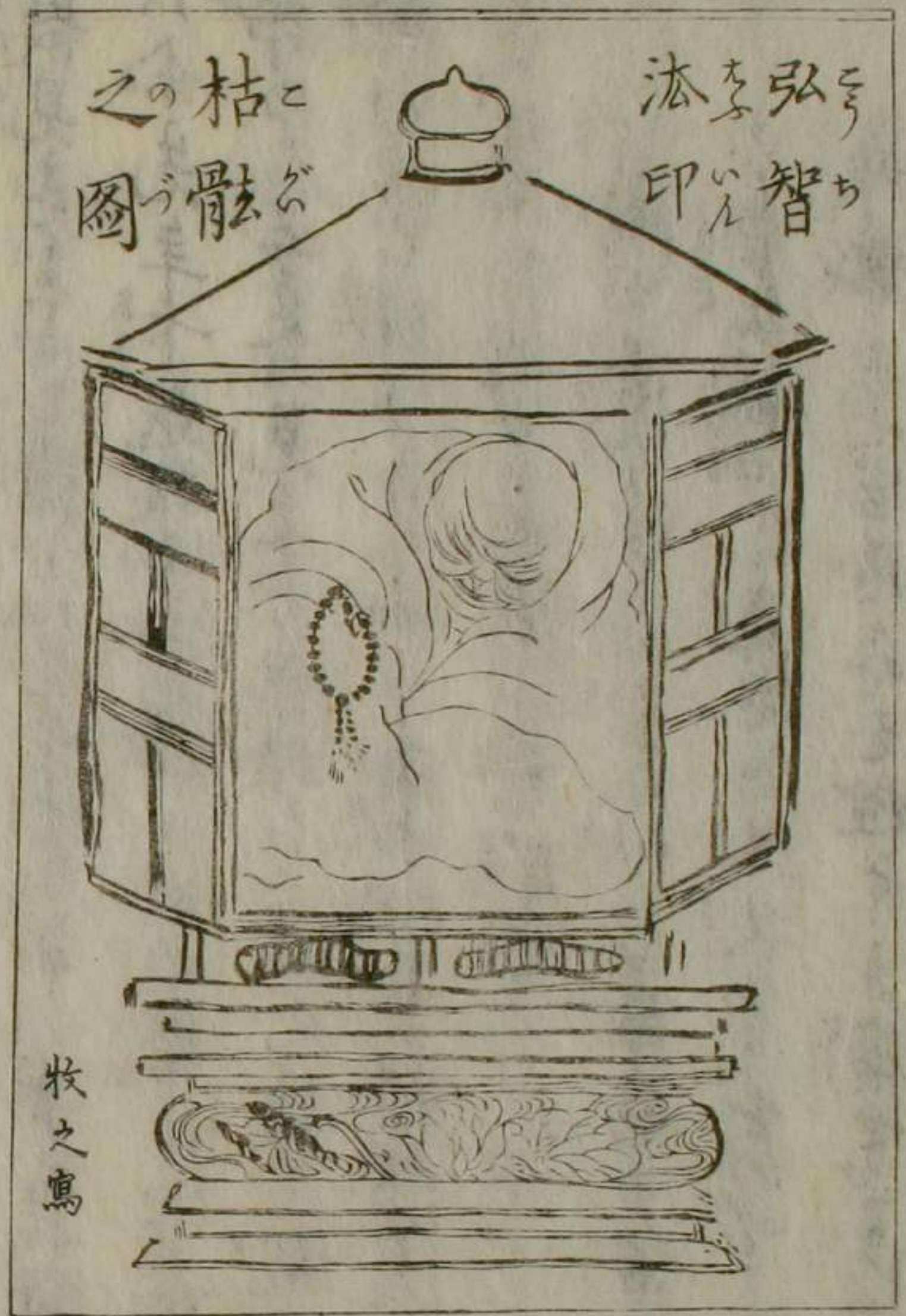
まども釈氏を詰ふ小

似て説ふまばら小

贅せぞ○高僧傳小義

と覺へがさのそふとく

詳究せぞ



○土中の舟

蒲原郡五泉の在一里をり小下新田との小村あり或年此村の若とも夏
ありて阿加川の岸を掘り小土中より長さ三間をりりの船を掘り

全体少くも腐也形今の船小異るのそありて金具を用うべき処を
鯨の鬣を用ひ寸鉄をもやどし一なる処あり木もまき何の木ありを
弁とぞ者ありちとくハ異国の船あるんとりつとを余下越後小遊び
一時杉田村小野佐五右門が家あてかの船の木も作りたる硯箱を見
し小木質漢産ともちりとき上古漂流の夷船とやわらん

○白鳥

前よりりる如く雪譜と題するものハ他事をりて哥ふりて落題あれ
と雪はまき末ふりてア一姑くおひひりてを小まきを○天保三年辰四月
我が住塩澤の中町小鍵屋某が家のやより小喬木あり此樹小鳥巢を
むきび雛稍く頭をいそころ巢のうら小白き頭の鳥を見り主人怪し
人をしそ是を捕りてあり小全身ハ鳥小く白く嘴眼足ハ赤き鳥の雛
あり人々奇とて集り觀る主人俄小籠を作らせ心を盡し養ひ

や長く鳴音も鳥小異ありて我々近隣ありて朝夕を觀する
奇鳥ありて人も多く江戸へ出でて觀物小せんものありも有る
主人をいへりて其冬雪中ふりて山の鼯狐を餌小く
人家ふきてりて食をねまむ事雪中の常あり此の所為ふも籠
いかにして白鳥の羽をり椽の下小ありとては初編小白熊の事を載
たるゆゑ白鳥もまこと小記しぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端
小兩頭の蛇いてるを捕ふ長さ一尺ふたつを七の頭二つ並びて枝をふ
のりもかゝらも常の蛇ふらふとあるふも古き箱ふりて餌も
いかにして小二三日をてりての逃げきりやあつてをたづぬりてを
ざりりとて

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村といふありて小郡殿の池とて四方三町斗
の池ありて浮嶋十三あり晴天風あき時日出て十三の小嶋ありて
離散して池中小遊ぶ如く日入ると池の正中小ありて一ツの嶋とある
此池小種くの奇異ありて文多けきとあるは羽州の浮嶋ハものあり記
しる人の知る処ありて此らききはあつて人まことあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神といふ昔より祀る処也
その縁起ハ聞りてせり贅肉あるもの此神をいり小石をりていかに
撫社の椽の下の竹子の内へ投りてはく小日あつていかにやのあつる事
奇妙ありていかにいかに小石のあつる形ありとていかにいかに人の圓め
するごとく圓石とあるも又奇妙ありていかにいかに社のえんの下小大小の

圓石満ちたり○百樹曰余も小千谷小遊び一時此石を視て話柄小
一ッ持帰んとせし小所の人のゆめや此神是石を惜み玉とらひつゝと
きて取るをりとの処へつゝつゝ視る小数万の石人の磨る
よる玉のごとく凡神妙ハ肉知を以て測るべし

○美人

百樹曰小千谷の因ふ余小千谷の岩居が家小旅宿せし時天保七
或日筆を採小倦山水の秋景を觀をやくと獨歩のこ小千谷の前
小流る川小臨岡小のり用意し書を書くも毛體を老樹の下小
志き烟らゆるせつ眺望ハ引舟ハ浪小廻りさうごらるが如く下る
舟ハ流小順さる飛小似たり行雁字をさる歸樵画をひく
群木ハ少しく霜を添く紅く連山ハ僅小雪を載く白く寒
國の秋景江戸の眼を新小ありちりて一絶を得るごとく

かゝるがめめをりも十六七の娘三人ちり柴菴をせむ山
をのりてさふをさるひあやんものゆめをさる余ハ
山水小目を奪はるる小火をかるまきとく烟管さるよせする顔を
見ま蓬髪素面あて天質の艶色花もゆめ玉も比を
百結の鶉衣此趙壁を羅む余愕然し山水を棄て此娘を視る小
一揖し去り樹の下草小坐してあをあげてさせるの火を
うのゝむをめ三人ひとく吹烟双無塩獨の西施と語るハ蒹葭
玉樹小よりが如く皓齒燦爛とくしらハ白芙蓉の水をいで
微風小揺がごとく嗟乎惜べしかゝる美人も是邊鄙小生と昏
庸頑夫の妻とあり巧妻常小拙夫小伴とて眠り荆棘と俱小
腐らん事憐不堪たり若江戸ふいぎ朱門小解語の花を
あひハ又清樓小揺泉樹の栄をり此隣國出羽小生とて

小野の小町が如く美人の名をもあまぎふ此美人を此僻地小出
 す八天公事を解きさふ似たりと獨歎息しつ言んとあり小娘ハ
 去來とくうさび柴箆をせおひうちつとく立さうけり目送る
 願越後少美人多しと人の口實ふりもうべり是無他や水
 小よりゆゑありささぐ織物の清白なる越後の白縮小勝さる
 りことささぐ此邊ハ白縮を産する所あり以て其水の至清なる
 をあざ江河潔清あるハ女小佳麗多しと謝肇淵がひひも
 理ありとちひつて旅宿小帰り云々の事あり美人を視たりと岩
 居小語りけとバ岩居のやう渠ハ人の智美女あり先生を他國の
 人と眼解欺きたをこの火を借するん可憎く「吾くむむ」が
 吾たむの火を借て美人小えん縁をむむび」と戯言けとバ岩居
 手を拍り大に笑ひ先生誤りうとバ屠者の娘ありと聞くと再び

愕然たり糞壤妖花を出るとかふる事ありひひとあるべし
 ○再按小野の小町ハ羽州の郡司小笠の良實の女あり揚貴妃ハ
 蜀州の司戸元玉が女あり和漢俱ハ北國の田舎娘世ハ美人の名を
 つたふ北方小佳人ありといひも北ハ陰位ありハ女小美麗を出さ
 めやあらん二代目の高尾ハ御野州小生と初代の薄雲ハ信州小産
 とハ小北廓小名をあせりささぐ越後小件の美人を見ても北國
 あまぎふあざ

○蛾眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月羽郡越後椎谷の漁人椎谷の捕候の御封内ありある日椎谷の
 海上小漁して一木の流し漂ふを見て薪小せをやとく拾ひ取て家小
 りの水を乾きんとく庇小立寄むきを椎谷の好事家通りかり是を
 見るとたぬ木とあり熱視小蛾眉山蛾眉山の山下喬喬の山といふ五大字刻りあり

しをのつゝかの国の物とすひ漁人いさなの薪たぎを与てをひうけまるとて
 さて余よが旧友きうゆう觀劬上人くわんじゆハ推谷おひや田沢村たざむら強学きやうがくの聞えあり嘗て好事こうじの癖
 あるを以てかの橋柱はしむらの文字まじを双鈎さうこう刊刻かんかくして同好どうこうふたり且橋柱はしむら小題
 たる吟詠ぎんえいをよひ是も又梓あふさふして世よふ布ふんとせしむるが故ゆゑありしむまご
 不果ふこうの橋柱はしむらハ後のち小御領主こみりやうしゆの御藏ござうとありしむま推谷おひやハ余よが同国どうこくの
 とも幾里いくりを隔へして其真物まことものを不見みえ今いま小遺憾こい憾とて姑傳寫こくでんしやの圖ずを
 以てて小載せつ。百樹ひやくじゆ曰い杖之翁じやうのおきなが此草稿こゝのせうごのせしむる圖ずを見みふ少すくくおのふ所直
 百樹ひやくじゆ曰い了阿上人りやうあしやうハ和哥わがの友相場氏あいはらぢハ推谷おひや侯こうの殿人とのんときて上人
 の紹せう介けいをのつゝ相場氏あいはらぢ小對面せうたいめんして件けんの橋柱はしむらの事ことを尋たずふし小
 余よ小謂せういしハ橋柱はしむらのあつて標準ひょうげんありしむま俗しやく小書輪しやくしよん帛はくといふ物
 小作りせうぞりしむまを出だして其圖そのずを示しる余よが友ともの画人えがしやう千春子ちしゆんしが真
 物ものを傍たがひふしむま縮圖しゆくずあり娥眉山がひさん山下やまのした齋さいといふ五字ごじハ相場氏

ふつゝ心を深ふかめたるつゝまゝしむま下した小圖せうずを彫きざする人の頭かぶを
 左ひだりり小顧せせその下した小五字ごじを彫きざつけハ是こゝより左ひだりり娥眉山がひさん山下
 橋はしありしと人ひとふを以て標準ひょうげんありしむま是こゝより左ひだりり娥眉山がひさん山下
 渙くわん然ぜんしむま今俗いましやく小指せうさしを多おほくしむまそのまゝふを以て所ところを記しる
 しむまを問とはる事ことあり和漢わかんの俗情しやくじやうありしむま事ことありしむま此標
 準ひょうじゆんを得えたる實事じつじを以て北きた海かいハいづこの所ところも冬ふゆふといふま常じやう小
 北風きたかぜ烈れつしく磯いそへ物をうちよめる推谷おひやハたなきものふとがしむま所
 の小貧民せうひんじん拾ひろひ取りしむま薪たぎとるま事こと常じやうありしむま小文政せうぶんハ酒さけの
 十二月例じふにがつれいの如ごとく薪たぎを拾ひろひ小出せうでしむま物ものありしむま柱はしらのごとく浪なみ小漂せうでふ
 を以てて人ひとの頭かぶとるもの物ものありしむま甚さか兇惡けうあくあり貧民ひんじん等ら悞あやましむま
 さりものつげより見居みゐたる小此こゝの意い不ふ磯いそふらちあげしむまを
 見みる人ひとく立たよりしむま小文字せうもんじハあまも讀者しよくじやうありしむま是こゝハ何なにもの

みんとさるぐ評し居るをりしも近き西禅院の童僧
 通りかり唐詩選ゆきわゆる蛾眉山の文字を讀こし唐土の
 物ありときて貧民拾ひて持よりさきく唐土の物ときて薪ゆ
 せりし事聞傳し竟る主君の藏とありし語とき
 ○按る小蛾眉山ハ唐土の北に在る峻岳也富士もくさき高山
 あり絶頂の峯双立し八字をあらせぬ蛾眉山といふなり此山の
 標準日本の北海へあがきたりたる其水路を詳究せんとい唐土
 歷代州郡沿革地圖に拠りて清国の道程圖中を檢する小蛾眉山
 ハ清朝の都を距こと日本道四百里許の北に在り此山小遠くは
 一條の大河東に流蛾眉山の麓の河は皆此大河に入る此大河
 瀘州を流し三峡のふもとを過ぎ江漢に至り荆州に入り洞庭湖
 赤壁瀕陽江揚子江の四大江に通じ江南を流洩りて東海



蛾眉山下喬

小入る是水路日本道五百里をりありきて件の標準洪水にて
 水小入りけん洞庭赤壁瀕陽揚子の海の如き四大江を蕩漾周
 流し朽沈む溜く水路五百餘里を流し東海に入り巨濤小
 千倒し風波小万顛をまじり新折碎粉せま直身挺然とて我
 国の洋中漂ひ北海の地方小近より推谷の貧民小拾はる始
 水を辞し既小一爐の薪とありきを幸ふ字を識者小遇ひて死灰を
 のがし韻客の為小題咏の美言をうけりてのそありて竟る
 推谷侯の愛を奉りて身を宝庫小安んじ万古不朽の洪福を
 保つて奇妙不思議の天幸ありし實小稀世の珍物あり
 縮圖左の如し

登苗場山之図

霄間清露湿衣巾
寒際平蕪四望秋
呼吸極方通帝座
徘徊却愧问天人

吐息毛雲とや

わろき 雲の秋

秋月庵牧之

下十

果

川曲千州信

秋村

秋山



聖譜二編卷之下

三十五

文溪堂藏

按ざる小蛾城同韻 五何反 のまが相通 往く書見を橋を喬小
作した了頗おほる異体あり依よる明人黄元立が同考正誤清人顧炎武が
亭林遺書中小在ある金石文字記ありハ碑いん文摘奇き藤花亭十種
ありハ揚霖竹菴が古今釈疑中の字體の部ぶと通卷一遍いん搜
索さく考こうととも喬きやうの字あり蛾眉山かひざんのある蜀しやくの地ハ都とを去さる事
遠とほき僻境へききやうあり推量すいりやうする小田舎おひなの標準ひょうげんありハ學者がくしやの書しよしり
ああららず俗子の筆でるべべきき我今の俗竹ぞくを竹たけといハハ誤
の類るい猶博識たうはくしきの説せつを俟まちつ

○苗場山

苗場山ハ越後第一の高山あり魚沼郡ハあり登り二里にりとのハ絶頂たつていハ天然てんぜんの苗
田あり依よる昔むかしより山の名な小呼よびあり峻岳しんがくの巔のぼハ苗田ひなであり事こと甚奇しんきあり
余よ其奇跡きせきを尋たづんとしハ事こと年としありしハ文化八年七月偶ふたなり

友人四人・嘯齋・擲齋 從僕等しよらふハ食類しよくるい其外用意そのとの物をりりハ同月五日
未明みへいハなちなちいいて其日そのひハ三さん僕ぼくとのハ驛えきハ宿しゆくり次日つぎ日曉ひがを侵かして此山このやまの神職かみハ
いいりりハハ杖つゑををりり案内者あんないしやを備びふ案内あんないハ白衣はくゐハ幣へいを捧たげて先まハ
ままむ清津川きよつがはを涉わたりて禁かむハいいててり峻道しんがうを踏ふ峻路しんろハ登のぼる小樹せうじゆ樹
森列しんりやくハ日ひを遮さり山篠やまのささ生なハ浅ありり徑みちを塞ふく枯くる老樹らうじゆ折をりり路ちより
横よこりりを踏ふハ卧ふ竜りゆうを踏ふととハ一條いっしやうの溪河せきがはを涉わたり猶なほ登のぼる事こと半里はんり
許た右みぎ折をりりををりり左ひだりハ曲まりりそのその奇木きこ怪石かいせき千態せんたい万状まんじやう筆ふでを以もて
ていいハハ已まハ半途はんとハいいててハ鳥とりの聲こゑををりりハハ殆たいてい東西とうしを弁わりりて
道みちありりととハ案内者あんないしやハハ知りしててハハ山篠やまのささををりりハ幣へいを
ささけけててハハ示しハ藤蔓ふじづつ笠かさハハハハ竹たけ身みを隠かくハ石高いしハハハハ
徑みち狭せまくく一歩いっほも平阻へいそののををりりハハ午ひるををりり頃山きんざんの半はんハハハハ
僅ひづの平地へいぢを得えて用意よういハハハハ即座しやくざを木蔭こかげハハ食たををりりハハ暫しばく

憇てまこのりりて神樂岡との所ふりてことより地木さうふ
 うく俗小唐松とのりの風ふたけをのまきまきま梢ハ雪霜ふ枯されん
 低き森をりてさかこふありまこのりり少くさう御花園とのり
 所山様盛ひき百合桔梗石竹の花あそのさぬ人の植中あひふ似
 名をまきまき異草あまこあり案内者小問ハ薬草ありとのりまこ
 のりりゆきまきまき棧越る道ふあり岩ふとりつき竹の根を力草と
 一歩小一音を発しつゝ氣を張り汗をまきまき千辛万苦一のりりて
 馬の背とのり所ふり左右ハ千丈の谷ありあむ所僅小二三天一脚をあや
 すの時ハ身を粉砕ふるまきまきまき忙怕あむて竟小絶頂ふりつきのぬ
 〇偕同行十二人まき草ふ坐して憇ふ時已小下哺ありまき案内者の
 のりりハ登り二里の険道まきまき一日小往來まきまきまき絶頂小小屋在
 こふのりり人必その小屋小宿まき事ありこのりり今その小屋をこまきまき

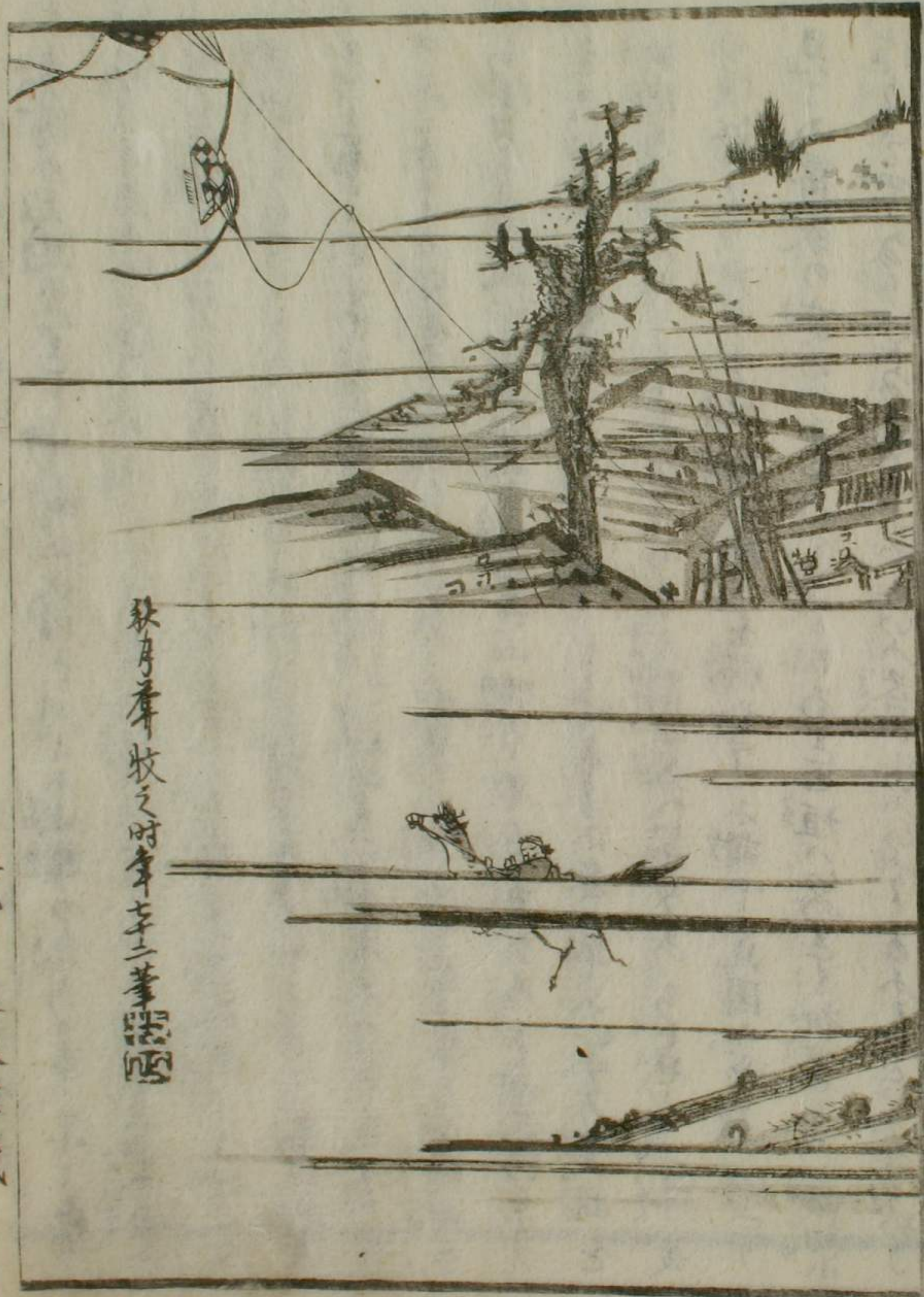
木の枝山き枯草まき取りあつらふらうまきまき匍匐入るまきり小作りた
 るハ野非人のまきまきまきまきまきを今夜のやどりふまきまきまきまきまき
 まきまき笑ふ僕まきまき枯枝をひらひ石をあつらふ假小灶をまきまきまき
 食物を調せんまきまきあるひハ水をたぐひて茶を煮まきまき上戸ハ酒の烟をいそまき
 をまきまき越後まきまき浅間の樹をまき信濃の連山まき眼下小波濤まき千隈
 川ハ白き糸をひきまき佐渡ハ青き盆石をまき能登の洲崎ハ蛾眉をまき越前
 の遠山ハ青黛をのりまきまき小眼を拭て杖策第一の富士を視いまきまきまき
 まき雪の一握りを置かまきまき一人ハ手を拍奇ありと呼び妙ありと称讚まき
 勝万景應接まきまき小遑あまきまき雲脚下小起まきまきまき忽晴まき日光眼を
 射る身ハ天外小在が如し是絶頂ハ周一里とのりまきまき平光高抵の所
 を不見山の名ふまき苗場とのりまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 まき田の如き中小人の種まきまきまきまきまき草生ひまきまき苗代をまきまき

のり〜るやうなる所をわりのことを奇ありとわらふ此田の中は蛙島冬虫を
 ありて岩の田を事處又ある日そのや田水枯ると二里の巔に此奇跡を観ること
 甚不思議の灵山あり案内者いひく御花園より別な徑ありて竜
 岩窟といふ所あり窟の内は一條の清水ありとてそのやより古錢多く夥口ニツ
 掛りありて神を祀るむより如斯といひつゝ今草木も塞ま
 てまゝありてとりの絶頂あり石一刺して苗場大権現とあり案内者ハ此石
 人作ありて天然の物といひ俗傳ありとて見ゆらち目をまよふ小屋案内ハ
 挑燈をさげとありと外ハ火を焼くありてび食をうのり酒を
 酌六日の月皎くとてしそ空もちんたやうや桂の枝もをさげとありて
 人々詩を賦し哥をよみ俳句の吟興もありてや時をうりたるや寒
 気次第小烈しく用惠の棉入もあつて終夜焼火ふありて夢も
 むらむらとあつてのりつらつらとむらむらとあつて御來迎を拜

たまたと案内にいふまゝを拜し所いひり日の昇を拜しまゝとて山
 をふらむなり 別紀行ありて云 ○百樹曰余越遊し時牧之老人ハ此山の地勢
 を委し〜まゝ真景の圖をも視る小巔の平坦あり苗場の奇異竜岩
 窟の古跡あり水あり自在の山ありとて〜ハ上古人ありて此山をひりて
 絶頂を平坦あり馬の背の天険をたのむて〜小住居し耕作をこ
 し〜るがむびてのち其灵視るふと〜りて苗場の奇異をもあやと思ひ
 国史を捜究せば其徴を端をも得べや博達の説を聞ん

○三四月の雪

我国冬ハさ〜り春ふありて二月頃までハ雨降る事あり雪のふる由
 ある〜春の半ハ〜小雨ふる日あり此時ハ〜晴天ハ〜より雨
 ふも風も去来より積雪を〜消るありさ〜も家居あり乾
 北東あつる方ハ〜事〜山〜の雪ハ里地より〜あるま〜をけ〜



秋月葺牧之時幸幸三筆墨画

大正二年三月

三十九

大正二年三月



市中四月雪解圖

大正二年三月

文海堂

○鶴恩小報也

天保七年丙申の春我々郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を
 二松といふもの高ひの爲西國小千谷或城下小逗箇の間旅宿の主かを
 小此近在の農人おのまか田地のうち小病鶴ありて死ふいふんとするを
 見つけ貯る人參みさ鶴の病を養へ小日あつて病癒て飛去りけり
 さて翌年の十月鶴二羽かの農人か家の庭ちり舞ふなり稲二莖を落
 し一声が鳴て飛去りけり主人拾ひとりて見ふその丈六尺小あまう穂
 も是ふつと長く穂の一枝小稲四百粒のり主人おつて去る去年の
 病鶴恩小報んとり異国より怪えきなりいふん何ゆもあまうとめづ
 りき稲ありとて領主小奉りけり小志むくくあまうのちその
 まう主小なかりりよ中あつておわせふとて苗のころふいり心をつて
 植つけり小鶴があまうふらうとてよく生ひてけり國の守りも奉り

一とうと直り東五郎猶その村その人を尋きけり鶴を助けよる人
 東五郎が縮を賣る家あまうとてまゝその家ふいり猶委り聞てさる國の土
 産小せん穀を二粒賜はりてとてけりあまう越後ハ米のよき國とてけり
 ことさう小生いふんとて五六十粒与へるを國へ持りて事の来由をやて
 邦君小奉りて御城内小植り玉ひ東五郎へ御褒賞あまう在りと
 小千谷の人その頂物がまうりおの小余かごとく賤農もかゝるめてよき
 御代小生とてまうこを安居しんか筆も採あまうとて千年の昌平を
 いのり鶴の話小筆をとらめつ猶雪の奇談他事の珍説あまう漏り
 するも最多けり生産の暇あまう編を嗣へ

通巻画圖

京水 岩瀬百鶴筆



北越雪譜二編四卷大尾

京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考 五卷

本朝古印の模本を圖し制度用格を弁を考證漢印小跡を以て和漢と目せざる朱紉賢が印典の作格小做ふ

○食物沿革考 五卷

昔の食物と今の食物の沿革を毎ト食器の古圖ありこのせ諸書を引て考を考ふる

○和漢押字考 三卷

俗小書判といふもの起原を考へかきもの作りやうを論弁せり

○骨董集三編 卷二 四編 卷二 醒齋京傳先生遺稿京山人翁増修

○女粧考 前後 六卷

○芭蕉年譜 三卷 いせ一代の始終を考ふる

○高尾考 同 万治の高尾白刃不死の事説を論弁し高尾十一代の傳遺墨遺器を考ふる

○茶の湯初心抄 同 茶の湯を學ぶ人此書をこればその大槩をあり茶席のつらりて日垂をえざる心得を考ふる

曲亭馬琴翁編集 著作堂一夕話 全五卷

此書は曲亭馬琴翁七十余年の長壽中五十年來見聞せし珍説古今未發の高論ありを録し集り新奇妙談を多くし人聽入実小曲亭小対してその話を聞か諸君近き小發行を考ふる

御伽やうみ 全十卷

この書は古今の奇談珍説の原本より小説怪談の書多しといふ御伽やうみの上より和漢の奇談を考ふる中より御伽やうみの實小怪談奇談の最第一の物語ありの本を作るとありぬべし

閑窓瑣談 全六卷

遊ハせ小ある隨筆の旨趣と事より雅俗を不倫博識なり珍文僕文を考ふるは思女童家小積易きを考ふるは聊も学か自慢の事を載せ古人今人の面を考ふるは集りてハ養生小ある(さ)教へんと考ふるは卷を用け益ありの最也

天保十三年 壬寅孟春

全志發行書林

大坂

心齋橋博勞町

河内屋茂兵衛

江戸

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛藏版

Blank page with faint horizontal lines on the left edge, possibly indicating a table or list structure.

Table with multiple columns of handwritten text, likely a list of items or entries. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional Chinese or Japanese manuscript formats.



Small handwritten text at the bottom right corner of the page, possibly a signature or date.

